別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目

Between Counterculture and Consumerism:
Transformations in Representation of Beatniks in American Comics since the 1950s
(反体制文化と消費主義の間で―1950 年代以降のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容)

氏　　名　　社河内 友里

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、1950～1960 年代のアメリカにおいて、反順応主義的な文学作品によって注目を集めた作家集団、ビート・ジェネレーションの文化（ビート文化）に影響を受けて生まれたビートニクのステレオタイプが、その後の時代のアメリカでどのように変容してきたのかを、1950 年代から 2010 年代のアメリカン・コミックスにおける表象から明らかにするものである。特に、ビート文化の特徴である反順応主義的な態度と、消費主義社会との関係に焦点をあて、それぞれの時代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象形態とその理由を明らかにする。本研究は、アメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容を明らかにすることに留まらず、1950 年代以降のアメリカのポピュラー・カルチャーにおいてカウンター・カルチャーの要素がどのように存在してきたのかを明らかにする一例である。また、カウンター・カルチャーの概念が重要なものであり続けてきた要因や、消費文化によるカウンター・カルチャーの搾取の過程に関する議論に寄与することを目指したものでもある。

ビートニクのステレオタイプは、アメリカのポピュラー・カルチャーの中に、現在でも多く見られる。これまでの研究では、1950 年代末のビートニクのステレオタイプの形成を論じたものや、1990 年代のアメリカのポピュラー・カルチャーにおけるビートニク表象のリバイバルを指摘したものがある。しかしながら、1950 年代以降のアメリカン・コミックスにおいては、ビートニク表象が時代の中で絶えず修正されてきていることが読み取れる。また、ビート文化を含む 1950 年代以降のカウンター・カルチャーの変容については、これまでに、主流消費主義文化に絡めとられてしまう実態や、主流文化とカウンター・カルチャーの融合という視点から様々な論が展開されてきた。しかし、アメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容を詳細に論じた研究はまだない。そこで、

本研究では、1950 年代から現在までのアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容の様相とその要因を論じる。

第一章では、1950 年代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象を論じる。アメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の源は、ヒップスター文化の表象である。1950 年代半ば、いくつかのコミックが、ヒップスターの描写を通して、社会に対する反順応主義的立場を示した。1954 年のコミックス倫理規定の制定は、当時のアメリカ社会の保守的な側面を反映する出来事であったと考えられるが、ヒップスターのイメージを用いて規定への反抗を示すコミックもあった。しかし、1950 年代末になり、ビートニクがアメリカの主流文化の中で広く知られるところとなると、消費主義社会に絡めとられるビートニクの反順応主義の矛盾や限界を批判する立場からビートニクを描くコミックが登場した。*Mad Magazine* は、コミックの中で、ビートニクの反順応主義の矛盾を批判するだけでなく、“Mad non-conformism”という独自の新しい反順応主義を提示した。しかし、この新しい反順応主義も結局はヒップ・コンシューマリズム（反順応主義的なイメージにより促進される消費主義）の一部であると考えられることから、*Mad* も結局は消費主義社会に取り込まれていたといえる。1950 年代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象に見られる、ビートニクの矛盾への風刺には、当時の主流文化とカウンター・カルチャーとの間にあった絶対的な二項対立が反映されていると考えられる。

第二章では、1960 年代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象を論じる。1960 年代のビートニク表象からは、当時のアメリカ社会における中流階級、ボヘミアン、そして、皮肉な中立主義者という三つの立場を読み取ることができる。1960 年代のコミックスからは、カウンター・カルチャー、つまり、ボヘミアンの文化が、中流階級の文化の中でも重要視されていたことが読み取れる。メインストリーム・コミックス（コミックス倫理規定を遵守する形で出版されていたコミックス）に描かれたコミカルで無害なビートニクの登場人物は、若者を魅了する反順応主義的な要素を含意してはいるが、主流文化にとっての脅威とはならない形で描かれている。一方、アンダーグラウンド・コミックス（コミックス倫理規定に反対する立場のコミックス）の中には、ビートニクの表象を通して、急進的なボヘミアンの立場を示すものもあった。しかし、1960 年代後半になると、このような急進的なボヘミアンの立場のコミックに、反順応主義への懐疑的な視点が描かれるようになる。このような視点は、中産階級とボヘミアンの間の中立な立場から、*Mad Magazine* などの雑誌のビートニク表象の中に、皮肉を交えて描かれた。これは、David Brooks が「ブルジョア・ボヘミアン」と名づけた中産階級とボヘミアンの融合した文化を持つ人々の立場と類似する立場である。ブルックスは、ブルジョア・ボヘミアンが現れたのは 1990 年代であると説明している。しかし、これらの皮肉な中立者の視点からのビートニク表象は、1960 年代には既に「ブルジョア・ボヘミアン」と類似する立場の人々がいたことを示唆している。

第三章では、1970 年代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象を論じる。1970 年代のアメリカン・コミックスにおいて、ビートニクの登場回数は減少したが、いくつかの作品にはビートニクの登場人物を見ることができる。それらの表象からは、当時のアメリカ社会では、中流階級もボヘミアンも急進的な姿勢を弱めたこと、また、そのどちらとも違うオルタナティブな立場が新しく現れたことが読み取れる。これらの文化的な変容は、例えば、メインストリーム・コミックスでは、*Justice League of America* の Snapper の描写に見ることができる。登場人物のスナッパーは、1960 年代初めには、能天気なビートニクとしてコミカルに描かれていたが、1970 年代になると、より思慮深い人物として描かれるようになった。また、アンダーグラウンド・コミックの *Fritz the Cat*

では、1960 年代にはビートニクとして描かれていた主人公フリッツの死が描かれた。フリッツの死の描写は、主流消費文化による搾取を回避する方法は、カウンター・カルチャー自体の死以外にないという考え方を示していると解釈できる。これらの描写は、1970 年代に、中産階級もボヘミアンも、急進的な姿勢を弱めたことを示唆している。1970 年代半ば、このような状況下で衰退するアンダーグラウンド・コミックスと対照的に成長したのが、オルタナティブ・コミックスである。オルタナティブ・コミックの *Zippy the Pinhead* においては、ビートニクは因習的で順応主義的なボヘミアンとして描かれた。また、その因習的なボヘミアンとも、主流文化の中産階級とも違う、オルタナティブな立場が提示された。これは、主流文化に迎合しないが、資本主義とは対立しないでうまくやっていくという、新しい立場であった。

第四章では、1980 年代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象を論じる。1980 年代のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象には、政治的には保守的で経済的には自由主義的な、新自由主義の価値観が色濃く反映されている。1980 年代のメインストリーム・コミックスでは、ビートニクの登場回数が、1970 年代よりさらに減少した。1980 年代にほとんどビートニクの登場人物が描かれなかったことについては、ビートニクのステレオタイプの持つボヘミアン的なイメージが、当時の保守主義的な価値観と相容れないものであったためと考えることができる。1980 年代はほとんど描かれなかった *Justice League of America* のスナッパーは、1989 年に再度頻繁に登場するようになる。再登場後のスナッパーは、男性的な身体と特殊能力と強い精神力を持ったスーパーヒーローに修正されて描かれることとなった。この時、スナッパーは、ボヘミアニズムと力強い肉体の両方を示すものとして機能しており、レーガン時代後に求められた、保守的ではあるがより家庭的で内向的な傾向を持つヒーロー像として描かれていると解釈することができる。また、スナッパーを含め、1980 年代のコミックスにおけるビートニク表象には、当時流行していた「レトロ」の概念（皮肉な要素のある再解釈を加えた回顧主義）を読み取ることができる。「レトロ」の概念を用いたいくらかの皮肉からは、これらのビートニク表象が、新自由主義的な価値観に沿って修正されていることが理解できる。さらに、オルタナティブ・コミックの *Zippy the Pinhead* においては、ビートニクが、主流文化や新自由主義的な価値観にからめとられた急進的なボヘミアンの象徴として描かれた。同作品では、1970 年代に引き続き、主流文化とカウンター・カルチャーの因習的な二項対立に対して、オルタナティブな立場が提示されている。

第五章では、1990 年代以降のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象を論じる。1990 年代、アメリカのポピュラー・カルチャーにおいて、ビートニクのステレオタイプの再評価が起こった。アメリカン・コミックスにおいてもビートニク表象が多く見られるようになり、特に、スーパーヒーロー・コミックスにおいて多く見られるようになった。スーパーヒーロー・コミックスにおける再評価においては、ビートニクの歴史的背景やステレオタイプは修正され、1950 年代のビート作家らが小説に描いたような、元来のビート文化が反復された。また、スーパーヒーロー・コミックス以外のコミックスにおいては、ビートニクの歴史的背景やステレオタイプと共に、ビート作家らの文化までもが、より強引に修正された。これらの修正には、修正主義的で知性主義的な当時のアメリカ社会の傾向が反映されていると考えられる。特に、1950 年代のビート作家らの文化への言及は、ビート作家らの「反知性主義的知性主義」と関連付けて理解することができる。これらの修正主義的で知性主義的なビートニク表象は、ブルックスが論じている「ブルジョア・ボヘミアン」の「啓蒙的資本主義」の概念と共通する部分があると考えられる。

1950 年代から 2010 年代までのアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容から、ビ

ートニクのステレオタイプが、主流消費文化とカウンター・カルチャーの間の二項対立を超えて、中産階級、ボヘミアン、中立的な立場、また、オルタナティブな立場などの多様な立場を横断して機能しているということが明らかとなった。ビートニクのステレオタイプは、時代の中で絶えず修正され、各時代の主流社会の経済・政治状況にとって望ましい形での「ヒップ」な形態に変容してきたといえる。しかし、同時に、ビートニクのステレオタイプは、主流文化による搾取に対抗するための要素として、アンダーグラウンド・コミックスやオルタナティブ・コミックスにおいて言及されてきた。さらに、主流文化とカウンター・カルチャーの二項対立自体に疑問を投げかけ、全く別のオルタナティブな立場を示唆するコミックスの中にも、ビートニク表象が用いられているのである。1950 年代以降のアメリカン・コミックスにおけるビートニク表象の変容からは、ビートニクのステレオタイプが、めまぐるしい変化を続けるアメリカ社会における多様な立場を表現していることが明らかである。時代の中で、ビートニクのステレオタイプは絶えず修正され、変容している。このことが、ビートニクのステレオタイプがアメリカ文化の中に現在も存在している要因であると考えられる。ビートニクのステレオタイプは、主流文化とカウンター・カルチャーの二項対立における双方の立場や、その中間の立場、また、その二項対立に対してオルタナティブな立場を示唆する存在として、閾値的に機能してきたのである。